

「好色一代男」における「章首」の職能

——二ノ一「はにふの寝道具」の文章について——

島 田 勇 雄

「好色一代男」の成立経緯について、通説ともすべき書き下ろし説とは全く異なる予想のもとに、現存の作品に見られる遺構からその成立経緯を復原しようというのが、私の試みである。その試みの過程で、私の提唱した仮説はまとめて言えば、次の二か条に納まる。その第一は、各章の根幹部分は既成の異なる転合書中の複数の小片の編集接続によって成立したとするものである。⁽¹⁾それを補説すれば、その根幹部分が後述の四部構成法中の「本文」の前後の二部に当たり、それに新たに章首と章末とを添えたものが、現各章の形象であると考えている。その第二は、大は作品全体の構想から小は各章の部分的表現に至るまで、素案に対する修正案を経て成立したものが多いとするもので、たとえば女護島出発が当初の五四歳案から六十歳案に変更されたことを初め多数の項目にわたってそのことがあり、現作品は素案に基づくものと修正案に基づくものとの総合によるとするものである。⁽²⁾それを補説すれば、現作品は世之介の準一代記物として構成されてあるが、それは数次の構想案改変の結果で、それ以前には準一代記物とは異なる構想によって整備されつつあったと考えられるし、主人公も当初から世之介一人に設定されたものではなかったかも知れないと考えている。

そのような私の仮説は、終極的にはその語学的文体における裏付けを得て初めて真に信憑性を持つと言うに足る仮説にまで昇格するものである。即ち西鶴という一人の作家が異なる時期に異なる意図で作成してあった転合書、おそらく西鶴が（西吟らの弟子たちも大いに参画したことであろうが）、適宜に編集して各章の本文部分が成立したとか、そのようにして成立してあった本文に後來編集方針の改変に伴いその新たな方針の方向で書き添えを行なって各章が成立したとかの仮説を、私は立てているわけである。その同一人の異なる時期に作成したと考えるそれぞれを、語学的文体を手掛りに一つずつ選別しようと私は意図しているが、それが決して容易な作業ではないことは明らかである。しかしことの成否を問わず、とにかくやってみるべきだと考えている。そのための作業の一つとして、文章の基礎的具体的検討を試みようと考えているわけである。

二ノ一は男色物の章の一つで、男色物としては一ノ四「袖の時雨はかゝるが幸」に続く章である。一ノ四では、十歳の世之介が男色の対象の若衆として描かれたが、二ノ一では十四歳の世之介について、章首で若衆としての残る魅力を描写するが、にもかかわらず本文部分では一転して男色遊びの手だれとして現じ、再転して章末ではまた十四歳の少年に復帰する。つまり首尾は呼応するが本文部では異人物の趣を呈する、といったふうな構成である。本章の主人公に共通な性格といえは、ただそれが男色関係者であるという点だけであり、このほかの章にも多く見られるように本章でも主人公の人物設定にある種のアマさのあることは争えない。もちろん内容上の矛盾・不備はこれにとどまらない。その一つとして時間的関係の矛盾について別に述べたことがある。³⁾これらの現象は要するにこの作品におけるナレーションの不統一ということであり、その不統一を生ぜしめたには当然しかるべき理由の存在が考えられる。

作品の内容におけるそのような矛盾や不備は、自然と二ノ一を構成する各部の相互間や時にはそれぞれの内部において、それに対応する語学的文体における示唆的徴証を持つであろうと予想される。たしかに単語レベルにおいても、文節レベルにおいても、文レベルにおいても、文章レベルにおいても、それぞれ個々の示唆的徴証が看取される

ように思われる。即ち二ノ一では内容の乱れと表現の乱れとが相照応していると考えられるが、今はそのことを章首の職能の考察を中心にしながら考えたい。即ち章首の一般的職能を「一代男」全巻において考え、あわせて二ノ一の記事上の乱れの生じる所以については、私は「一代男」の成立経緯にまつわる諸手続きの変改等の投影にそれを求めようと考え、そのことの逐一にまでは今は及ぶことができない。

そのような、「一代男」の作品形象に見られる各種の矛盾・不備等について、従来の書き下ろし説に立つ論者はそれを決して矛盾として認めず、却ってそれは作者の意図的行為の帰結と把握し、その表現意図を古典の翻案に求めたり俳諧的技巧の余映に求めたりするのが常である。言語は本来多義的であり、文学的作品はそれを一層多義的含蓄的に展開させる性格を持つものであるし、文章というような言語単位としては最大の種類に属し、同時に文学作品にも属するという類の作品においては、読者に対し種々の解釈を許す余地はきわめて大きい。それなればこそ、解釈者の恣意的解釈を最小限にとどめ、できる限り客観的解釈を優先させるという原則を守るべきであろう。たとえば物語的手法とか仮名草子の常套手段とか俳諧的文章とかいった方法を優先的に発動させ、それらの手法を駆使することこそが専門家的解釈法であると了解することは、できるだけ慎みたいものである。それらの方法が時に有効であることは、私とて決して否定するものではないが、まず文脈から生じる意味関係をできるだけ客観的に把握することを優先させ、それが十分奏効しない時に初めてそれらの補助的解釈法の使用を考慮するという順序に従いたいものである。

ところで、表題における章首の性格を考えるには、時枝博士の「文章研究序説」（昭和三五年）を援用するのが最も適切であろう。時枝博士は文法論の一部門として、文章を研究対象とする文章論の創設を提唱され、右の書をその前駆的著作とされ、もって文章研究の進展をはかれた。そこでの重要な論点の一つに書き出しと冒頭との論がある。書き出しは文字通り文章の書き初めの部分である。それには具体的な文章の内容とさして関係のないことから書き始めるものがあり、また単刀直入的に具体的展開を帯びて書き始めるものもあり、その両者間の各種にわたるもの

もある。それらのもろもろを通じて、いかなる性格のものであれ、書き初めの部分を書き出しと命名された。即ちどのような文章でも、書き出しを持たないものはありえないわけである。それに対し、冒頭は文章の展開の開始部を言う術語とされた。私はのちほど章首・本文前部などの用語を使用するが、その章首は右の書き出しに該当するが、ただ私のばあい、それを当面は「一代男」に限って使うつもりであるし、また「一代男」のばあいでは、長編小説の一部としての短編小説に相当するもの、即ち文章に含まれる文章における書き出しに対して、それを一般的書き出しと區別するために章首と命名したわけである。私は章首を更に「導入」・「接合」・「書き出し」に分類し、本稿では主として「導入」について考察することになっている。私の「本文前部」は、時枝博士の冒頭によって展開する本文を前後の二部に区分し、その前部を指す。ただ時枝博士は文法論の一部として文章研究をされたが、私のばあい用語その他の類似にもかかわらず文法論内の作業とはまだ考えていない。

古くから用いられてある用語に枕がある。言い古されているものだけに誰もがこれについてはある種のイメージをそれぞれ持っているが、少し注意してみると、すべての人が必ずしも同一概念を定めているわけではなさそうである。たとえば野間光辰氏は「西鶴五つの方法（一）」（文学、三五巻九号）では書き出しと枕とを区別し、「枕は書き出しを含んで、はなしがいよいよ本筋に入るまでの部分」であるとされる。これは時枝博士の書き出しを書き出しと枕とに二分され、その書き出しは時枝博士の書き出しのごときものとされ、枕には本文に対する導入としての職能を認めるものと思われ、その点時枝博士の所説を一步前進させるものと解される。私の立場は、これに「接合」を加え、ことに「導入」と「接合」との関係をやや精しく考察することにした点に差違がある。

「一代男」の諸章について枕を問題とするばあい、野間氏を除けば、一般には時枝博士の書き出しの一種もしくは実質的には同一事項をさすものと理解してよいのであろう。ただ枕には慣習的にある種の予定概念があったり個人の私的慣用があったりするが、時枝博士の書き出しは本来漠然とした内容が考えられているのみで、特定の職能が想定

されているわけではないと考えられる。私の「導入」は書き出しより枕により近いが、この語の世間的用法との混乱を避ける意味で、枕の使用を避ける。

ところで、「一代男」と「源氏物語」との相似形が論じられて以来年久しく、「一代男」が「源氏物語」を粉本にした作品であるとの解釈は今なお十分には払拭しきれないが、両者の間には本質的に同類視を許さぬ断絶が認められる。「一代男」には大は全巻の構想から小は各章の細部記述に至るまで、王朝物語的性格とは全く類を異にする近代的性格が与えられており、その特徴的一現象として形式上の規則性や多種多様な類型的表現が挙げられる。形式上の規則性には、毎巻の章数・目録・年立・本題・副題の整備、每章本文二丁半挿絵半丁計三丁、挿絵に世之介を描出、本文の展開は、一章——一か年単位——一事件中心等々が挙げられるし、類型的表現には女性描写の順序、田舎者・はすは女・人形遊び・たしなみある遊女の記述などが挙げられる。私はそれらの一種として各章の四部構成法（その本文部は前後の二部構成）が挙げられると考える。二ノ一はその四部構成法の典型的な一例と考えられる。即ち、それは次の四部に区分される。

(1) 其年。十四の春も過。ころもあらためて。着更る朔日より。袖などをふさぎて。世の人に惜しまるゝも。後つきぞかし。

(2) 聊おもふ事ありて（略）我がまゝつのれば。見合て。寝道具。取さばきぬ。

(3) よこ島のもめん蒲団に。せんだんの。丸木（略）年の七年は。仕合と申侍る。

(4) 金性ならば。廿四の金か。我とは十違ひぞかし。仮初にもかかる一座にて。年せんぎくは。用捨あるへし。

各章の四部構成法とは、各章に共通する性格としてそれらが四つの異なる職能を持つ部分によって構成されると考えるものである。それらの各部に相当するものは、従来国語教育界では、大段落・意味段落（小段落・形式段落に対し）などと呼ばれてきたが、今それらに対し文章内の形式とその職能とからしてそれぞれ個々の名称を与えることに

した。それを二ノ一によって命名すれば、(1)章首、(2)本文前部、(3)本文後部、(4)章末の四種となる。もっともこの四種は、典型的もしくは規範的形式として抽出したもので、ある種の章にはいずれかを欠く構成法のものがあり、また各種の機能によって予定される正常な表現量に背いていずれかの部に量的異常の見られるものがある。たとえば章首は本来枕などの性質を分担するもので、形式面では少量でよいはずなのに量的に過大な章があるなどのことが見られる。それは各部の構成が主題・素材などに基づく具体的表現であるだけに所与の条件に影響される面が大きいいし、また作者の創作心理に左右される面も大きい、むしろ実情は私の仮説における転合書の編集、各種の修正案の成立に伴う收拾策の不完全さによる面が最も大きいと考えている。

四部構成法では、五言絶句の起承転結とか、論説文に多い序論・主題・本論・結論の構成法とかがあるが、「一代男」のそれは本文が前後の二部に区分されるような形式のもので、それは「一代男」式四部構成法と呼ぶことにする。その「一代男」式は本文前部が主として叙事文よりなり、本文後部が説明文になることが多いなどという形式上の特徴その他に基づいて考慮したものである。その四部の中で、各種の条件に最も異状の多いのは、私がかりに章首と命名した部分である。その章首という用語は、単に一章の初めの部分という意味ではない。それは文章において、一定の形式的領域と個有の機能とを有することに基いて命名した。その形式的領域としては、一章の書き出しから本文において展開の開始される直前までの部分をさす。その機能としては、第一に本文における展開に対し内容上その導入として機能するものであり、それを「導入」と名付けることにする。第二に当該章を長編の一部としてそれに連結されるものとして機能するものであり、それを「接合」と名付けることにする。「導入」は短編の書き出しという観点から考えたものであり、「接合」は長編の一部としての短編の書き出しという観点から考えたものである。

それで「導入」はそれ以前の叙述を全く承けることなしに書き始めるものであるが、「接合」はそれを承けつつ書き始めるのが通例である。また後続の叙述との関係では、「導入」は同章内の後続の本文に連続してその前駆的役割

をつとめるのが本旨であるが、「接合」は主として前章の本文もしくは章末に承接して間接的に全章の展開に連繋するのを本旨とするもので、同章内の本文への直接的連続を主目的とはしない。いわば「導入」が内向性であるのに対し「接合」は外向性である。「接合」のその職能は、ある意味では文章と文章とを接続させる接続詞的な職能のものと言えよう。ただ長編への接続は「接合」のほかにもいろいろの手段がある。「一代男」では各章の挿絵に世之介を描写すること、目録の年立に世之介の年齢を提示しそれを多くの章の本文で再出すること、多くの章に世之介の名を提示することなど種々ある。しかしそれらは「接合」の職能としては一貫的ではあるものの能力的にやや微力であり、章首における「接合」の具体性と強力さとは及ばぬものと言うことができる。

「導入」や「接合」の文章上の形式的在所としては章首を考えるが、そのうち「導入」は後続文に対する前駆的職能という要件からその在所は当然視されようが、「接合」は必ずしも単純ではない。即ち上述のごとくそれは一章全体が全身全霊的に負担すべき責務だからである。しかしそうは言っても、「接合」の意志表示が章首において実現されてあるとき最良の効果が期待できるし、その上更に挿絵等がそれを支持する形体であれば最高の効果が期待できるわけである。しかも実際の在所としても辞句的にも章首が主であることなどから、その規範的在所として章首を指定したわけである。

この両者の有無に関する事項では、「導入」については、その存在が本文の内容を充実させ含蓄深くすることは言うまでもないが、必ずしもそれは不可欠というわけではない。「導入」が本来修辭的要請の結果であって、形式的には必然的存在理由を持ちえないからである。しかし「接合」については、事情が違う。それは短編の長編への参加意志の表示なので、本来あるべきものである。それを欠くことは、原則的には長編への参加意志不明を意味し、全体的には団結不十分となり、更にその種の章が多数散在する時には、全体的統一が阻害される。事実「一代男」では、そのような危険性に充ちている。たとえば一ノ五「たづねてきくほどちぎり」では、「接合」がないばかりか世

之介の名も年齢もなく、十一歳のはずの主人公が二日酔のまぎれに友人の唐物屋の主人を誘って伏見の撞木町の遊里に遊び、よしある遊女をそれと見て根引して、見捨てず通ったという筋である。一ノ六「ぼんのうの垢かき」では、十二歳の主人公が酒豪のほかに「一夜も只はくらく難し」という鼻血ブーとして描写される。一ノ七でも類似の印象を受ける。それらはこの作品にまだ十分なじまぬ時に現われるので、別個の挿話の挿入かと錯覚したりひどい違和感に捕われたりしがちである。それは内容的な矛盾を越えてそれらをその年立の人物と強弁し、それらを長編に接続させようとする意志表示を欠いているからである。二ノ一にはそれがある。それがまたこの作品の矛盾を書き下ろし論者が認めたがらない理由ともなるのである。

「接合」の欠除には、また別の補充作用がなされているわけである。「一代男」のごとく、独立した文章としての個々の章の集積によって、それらを含むより大きい文章が成立するという構成の作品においては、個々の章の占める大文章内の位置もきわめて複雑であり、諸種の条件があい交錯している。したがって右のような「接合」の欠除も、若干章において不満足感を抱かせられたり違和感を感じさせられたりしても、更に読み進むことによって文脈が徐々に明晰となりそれらの欠陥も充足させられるのが常である。それは読者の側に問題解決への姿勢が常に活動しているからで、読者は常に未知のこと不審なこと不可解な事柄に対し探究し追求し充足しようとの姿勢を持っているからで、それが国語教育における一読主義をも可能ならしめているわけでもある。また同時に諸章における不備を問題視せぬ論者は、初見の読者の側に立たないで、文脈熟知の専門家の側に立って不備等を強力に補充するからである。しかし補足的もしくは補充的方法によって充足することのできたことと、充足の必要のないほどに充実していることとは、作品効果も大きく相違する。作品の完成度の如何は、作者の創作技術による面もあるが、多くは作者の執念の反映である。

「導入」と「接合」との实在関係では、両者ともに実在するばあいとしないばあいとがあるし、また「導入」があ

って他のないばあいや、逆に「接合」があつて他のないばあいも考えられる。形式上両者が分離できる辞句的配分の可能なばあいもあるが、両者の混在するばあいが多いし、時には同一辞句が両者の職能を兼ね備えることもある。たとえば二ノ一の章首の「其年。十四の春も過ぎ」と若衆の性的魅力を描写する部分は後続の本文に対する導入としての職能を果たすものであるが、同時に二ノ二における前髪の角入れ、二ノ三における元服という連続する設定の中では、それは同時に「接合」の職能を果たしていると考えることができる。ところで世之介の年齢の表出は種々の機能を表わしている。目録の年立では、それは章次を表わしているし、本文内では叙事文における必要条件としての時間の代用的機能を果たしている。叙事文の冒頭は時間・場所・行動者の三要素によって展開を開始するのを原則すると私は考えるが、その観点からすれば、二ノ一の章首が「其年。十四の春も過ぎ」としたり、一ノ四「袖の時雨はかゝるが幸」の章首で「浮世之介点しき事十歳の翁と申べきか」としたりするのは、本来本文の冒頭に納まるべきものが章首の「導入」に所在するということになり、形態上「導入」と冒頭とが截然と分離しないばかりか、冒頭の要素が「導入」に混在することもしくは冒頭の要素を「導入」が先取りすることを意味する。冒頭の要素を「導入」が先取りするという不自然さの成因には、作者の心理においてその要素に対する意識が強烈なためおのずからそのような結果が生じたとも解釈されよう。しかしその種の例の多いことや、それがおもに巻一・二のごとく主人公の若年の章で、章首における年齢と本文の適正年齢とに異常の認められる章に多いことは、章首の成立が異例であることを予想させる。たとえば、本文部が既に成立してあり、新構想のもとにその本文部を従前とは異なる年齢にあてて使用する時には、新ナレーターの立場からその新意図を章首に托しつつ新たに書きおろすよりほかに方法がない、ということになるであろう。このばあいそのようなことを考えに入れておきたいのである。

「導入」については、類型的表現とすべきものは見られない。一般に西鶴は類型的表現を好み、大は各章の構成から、小は女性描写の手順、はすは女等の生態の記述や評価に至る多方面の事項にわたって煩わしいほどの類型的記述

を行なっている。しかし個性的描写にまでは及んでいない。そのような類型的表現を好みしかも個性的描写にまでは及ばないのは、なにも西鶴だけに限らない。時代的傾向と言ってよいであろう。しかし西鶴においては、単に時代的傾向と割り切ってしまうほど、その類型的表現が特徴的であり、また類的表現に執する本質的態度が見られるのである。また同じく章首の職能の一つに数える「接合」には、いく種類かの類型的表現が見られる。それにもかかわらず、「導入」には類型的表現というべき特徴的な型には気づかない。なぜ「導入」ではそうなのか、ということとは、「導入」と「接合」との根源的存在意義に対する作家の側における認識やその実現のための努力・技巧などを含めて、興味深い一つの問題点である。

「導入」の職能とその修辭的技巧とについてこの作家の認識は十分とは言えない。そのため「導入」の職能が十分効果的になされてはいない。その職能を効果的に完成させるには、いろんな方法が考えられる。たとえば本文における主題とか中心人物とか場所とか事件とかの、カナメとなるべき事項に関して、それを集中的に細述し卓立する方法が効果的であると考えられる。ところがそれらについて十分な計算・考慮がなされずして「導入」が実現されていると思われるばあいが多い。「導入」に類型的表現の乏しいことがその端的な帰結であると言えるであろう。というのは、西鶴においては、類似の事態が頻出するばあい、それを個性的に把握しないで、類型的に把握し表現する傾向性を持つ。たしかに類型的表現は必ずしも西鶴独自の方法とはいえない面があるし、思考法や観察などの未生熟な段階では、それがすぐれた個性的な表現法でありうる時代もある。その意味では西鶴の類型的表現は西鶴独自の個性的表現であると言えるし、そのような意味での個性的類型的表現を西鶴は行なっている。そのような類型的表現が「接合」においてはある程度成立しているのに対し、「導入」においてはそれが確立していないと言える。そのことは、「導入」という職能についての認識が確立していないことの直接的反映と判定される。

「導入」の効果的使用への認識不足は、その逆効果的な用法をも結果させる。二ノ一の章首がそれである。二ノ

一の章首の大意はこうであろう。

その年、十四の春も過ぎて、衣替えの季節の四月一日から、(世之介は)元服に備えて、袖わきをふさぎなどして、世の男色好きに惜しまれるが、それは今なお残るういいういしさに見られる若衆としての色気のせいであろう。

つまり十四という年齢の性的魅力は男色における性的対象者としての若衆の腰つきあたりから発散するものであり、その若衆が成人となるための前駆的作業として袖ふさぎなどの身体的変化を行なったことは、男色愛好者に対する予告的絶縁状を意味するものであるが、しかもなお若衆の魅力の残映として腰付きあたりの色気が男色愛好者に対し強い愛惜の念を催さしめる、と述べる。

この章首における力点は二つある。それは十四歳の袖ふさぎと十四歳の少年の性的魅力を述べることである。袖ふさは、次章の前髪角入れ、次々章の元服と連続することによって、それらを契機に長編への「接合」とするものである。次に主人公が若衆としての性的魅力をなお多くとどめていることを強調するのは、十四歳の主人公にふさわしい描写である。これは章首の小主題であり、章首の描写はこれによって統一されている。これは本来本文における男色の叙述に対する「導入」とされるべきものである。ところが、章首の叙述は本文前部の内実に対し、本質的齟齬を露出する。即ち本文前部における主人公の描写は、本来男色関係において愛撫の対象となるべき若衆のそれではなく、性的行為の慣性化した血氣盛りの成人のそれであろう。したがって章首と本文部との共通点は、男色関係の描写という点だけであり、男色関係における主人公の役割は逆転してしまう。そのため「導入」としての職能は男色関係についての描写ということにとどまることになる。もし若衆としての性的魅力を述べて本文への「導入」とすると解釈するなら、「導入」における若衆は世之介少年とすべきであり、本文における対応者は飛子ということになってしまふであろう。その本文前部における十四歳の世之助の生態はこうである。

(ア)今宵一夜と。おもひながら。色なきかたに。舍りはといと。口惜しかりけるに。愛こそ。仮寝の夢計よと。

(イ)兎角酒にして。こんがうの角内。九兵衛を呼出し。よろこぶ物をとらして。後は乱れて。盃にすこしは。無理など言懸り。更行まで。月がゆがふたの。花がねぢれたのと。我がまゝつれば。見合て。寝道具取さばきぬ。

(ア)は、「今宵一夜は旅中の事ゆえ我慢しようとは思つたものの、色気のない所で宿るのはすぐ残念と思つていたが……。それでも田舎の飛子宿のこと、仮寝の夢以上の期待は持てまいよ、と」の意であろう。さすれば、この十四歳の少年はすでに夜ごとと日ごとに色気のある所での宿りが体に染みついた生活を続けてきたわけである。「今宵一夜と。おもひながら」を誇張を含んだ表現であるとしても、全くそのけはいもないことについての誇張的表現であると強弁することもできないし、飛子宿と知って喜び勇んだとの叙述も無視できない。その喜びは男色好きの成人のそれであるべく、男色遊びへの期待からするものである。イは男色遊びに精通した男の振舞いで、まず金剛どもに金を与えて喜ばし、酒も進んで、酔いのまぎれの無理事で飛子をいびり、はては亭主に、どうやら床急ぎらしい、と合点させる。そのような内容は、若衆の魅力の残ると強調された少年にふさわしいことではない。章首とは異った描写をすることによって読者をはぐらかす、それが西鶴の意図だ、などというふうな解釈も考えられなくはないが、それはウガチ過ぎというもので、そこに焦点において理解すると、章末のおかしみが薄れてしまうのである。

章首の世之介が男色関係においてはいわば受動者側であり、本文前部の世之介はいわば能動者の側であることは疑いないとすべきであろう。これと異った解釈、たとえば章首における受動者としての世之介が、飛子を自己に対する能動者として振舞わせるべく宿入りをした、というような解釈はこのばあい成立しないとすべきであろう。男色関係は複雑微妙なものであるらしく、男色一筋に精励する者もあり、男女の両道を遣い分ける者もありで、世之介は後者とされている。また飛子の類が女客に対し男性として振舞うという関係における両刀遣いも作品に現われる。また能動者が受動者に一転することの往々あることも読み知っている。しかし章首の世之介と本文前部の世之介との関係は、それらとは相違する。この世之介は年齢的には受動者としての若衆にランクされながら、内実は能動者としても

手だれであったことになる。そのように解釈すると、章首における若衆情趣を本文前部の記述が裏切ることになる。また逆に、本文前部のための前駆的記述として、読者を作中人物の理解へと導くべき「導入」が、その本来の職能に反する記述を行なって効果的な作品理解を妨げていることになる。いずれにしても、「導入」としては正しく十分に機能していないことになる。

元来章首の表現内容は、作者が「一代男」を現行のごとき世之介の準一代記物として完成するためのものである。それは私のような「一代男」の成立観を持つ者にとっても、従来説としての書きおろし説を持つ者にとっても、同様であるはずである。私は現行「一代男」は複雑な経緯の結果成立したもので、準一代記物に落着する以前には別の構想によって大略の本文が成立しており、準一代記物としての構想が成立すると、その構造に基づいて改稿・書き添えがなされたと考える。二ノ一の章首は最終的ナレーターによる編成であり、その時点でその本文を十四歳の章として定着させることに定め、その意図を作者が章首の表現において指示したと解する。章首の表現が作者の最終的意図である、ということについては、拙論に賛しない立場でも認めねばなるまいと考える。即ち本章を十四歳の章に配当し、その意図を章首に表明したことは、よかれあしかれ本章のすべてを十四歳の少年の行爲として把握すべきだとし、またある種の読み取り方を取ればそれが可能だと考えた結果であろう。そのようにして、章首の表現の意図が十四歳の若衆の描写にあり、十四歳の章として本章を長編の一端に組込むことが作者の意図であったとするなら、厳格主義的観点からは内容上章首と本文前部とは順調に連動しているとは言えないわけである。二ノ一の「導入」は十分成功しているとは言えないと考える。

このような内容上の齟齬がただ二ノ一のみに終るなら、それらの説明原理として俳諧的文章とか西鶴的修辭法とかを御意のままに使用されるのも差支えないであろう。しかし同様の現象は一ノ五（十一歳）から以後の世之介の少年時代に充てられる数章のことごとくに連続的に認められるのである。特に少年時代物において章首等で指定された年

齡と本文の主人公の行動から推定される年齢との間に、断絶・違和感が集团的に連続的に常に感じられる、ということとは留意すべきことである。たとえば一ノ五「たづねてきくほどぢぎり」は、書き出しに「新枕」とするように世之介の初体験に充てられた章であるが、内実はこの主人公は菊の節句の二日酔のまぎれに知人（唐物屋の瀬兵衛という一家のあるじ）を主体的に誘って伏見の撞木町の遊里に遊び、たしなみある遊女を身受けして見捨てず通ったという内容である。一ノ六「ぼんのうの垢かき」では、十二歳の主人公が「一夜も只はくらし難し。若ひ雛女はないかと。有ものにまねかせてみるに」といった、酒豪色豪兼備の大つわものなのである。このような各章の構成上の本質的部分について疑念を抱かされる事柄が連続的に現われるという条件の中では、その解決法を俳諧的文章といった不安定要素の強いものに求めるのは無理であろう。二ノ一の章首が「導入」として十分に作動していない、ということは、それらの背後的關係を踏まえて述べたものである。

また、それらの章では章首の辞句等によって、その主人公を一定の年齢に配当する指示が与えられている。二ノ一では若衆としての魅力の残る十四歳の少年として描写されている。もし本章が書きおろしであるなら、作者はみずからが章首で定めた人物設定の線上で、それと矛盾することのない人物として、本文の主人公の描写を展開するはずである。章首を承ける文脈の中で、たちまちにして内容上の断絶とそれに応じる文体上の断絶を生じることがありえないはずである。しかし現実には上來述べてきたような断絶が存するが、その理由としてまず考えられることは、作者の構成力が一章の長さを持続させるに耐えないものがある、ということである。たしかに作者の構成力は雄大な長編に耐えるほど強靱であるとは考えられないが、しかし一章の長さに耐えられないものとも思われない。したがってそれらの諸章の欠陥の理由は外に求めるべきであると考ええる。

それに対する私の仮説の概略はこうである。各章を四部構成とし、本文を前・後の二部とする。本文の二部はそれぞれ別個の転合書中の小片を根幹として成立し、それらに対し章首を新たに添えて準一代記物成立時における作者の

最新意図の表明の場とし、また同時に章末を添えて本文の結末とするともに、最新意図により当該章を準一代記物としての長編の結末ともするよう配慮する。そのような方針のもとに全巻の整備・編成を行なったものと考ええる。また「一代男」の構想として現行のごとき準一代記物に落着するまでには複数の構想が立てられ、準一代記物の直前の構想が非一代記物であり、それらの方針のもとに大略成立してあった本文を準一代記物に転用したと考える。それらは既成の本文を考慮しながら全巻の編成を行なったのであろうが、準一代記物という最新構想を優先させ、その構想に合わせた章首の表現が優先し、本文部は既成のもののうち最も近似価を持ち、若干の齟齬はあっても内容上の関連性を持つものを選び、それは章首に接続したものである。章首はほとんど新たに書きおろされたものと思われるが、若干の章首に既成の転合書から摘出使用されたと思われるものがある。二ノ一の章首もそうであろう。このことを初めとして、本文の二部構成法、章末の職能、全巻の構想の変遷等については別の機会を待ちたい。

注 (1) 昼のつり狐―好色一代男成立攷(解釈 昭和四十六年十一月) 一代男における中国筋物について(解釈 昭和四十八年

一月) 好色一代男における遊女品定め文 上中下(文学 昭和四十八年一月〜三月) 好色一代男成立についての試論―

地方遊里物の一種を中心に(近代 昭和四十八年七月) 「一代男」における東海道筋物について(解釈 昭和四十八年八月)

(2) 「好色一代男」成立の経緯(一)(二)(三)書きおろし説否定の根拠(文学 昭和四十八年十二月〜四十九年四月)

(3) 「好色一代男」成立の経緯(二)(文学)